

平成 27 年度

学校関係者評価報告書

ベルランド看護助産専門学校 学校関係者評価委員会

平成 28 年 1 月

I. 重点目標について

重点目標 1 学校評価の充実とその情報公開

取り組み	① 学校関係者評価の実施 ② 授業評価の実施 ③ 評価結果の情報公開
評価	<ul style="list-style-type: none">平成 26 年度の自己点検・自己評価の結果が、平成 27 年度に HP に掲載され情報公開されており改善が図られている。実習評価も、学生からの評価と実習指導者の自己評価の双方向で行われており素晴らしい。授業評価については今年度実施されているが、その結果を情報発信していけば教員及び学生の募集にもつながるのではないかと考える。外部講師の評価の情報公開とフィードバックをどのように進めるかがこれからの課題であるとする。

重点目標 2 教員の質と量の確保

取り組み	① 人材確保対策 ② 教育力の向上（研修会参加、研究の支援他）
評価	<ul style="list-style-type: none">人材確保対策については、JREC-IN（科学技術振興機構）の求人サイトなどを活用してはどうか。生長会組織として看護職からの教員への希望者や推薦者を出せるように連携を図ることが必要である。教員の残業時間が多い。教員のWLB対策の検討が必要である。今後、業務の洗い出し、事務組織との連携等により業務改善が必要である。教員の過重責務の改善について、実習指導においては臨床からの協力と連携の依頼が必要であるとする。

重点目標 3 教育環境の整備

取り組み	① 学内演習設備、教材の充実 ② 学生や教職員の自由空間や学習空間の確保
評価	<ul style="list-style-type: none">新校舎建築の状況を視察し説明を聞き楽しみである。看護大学校移行にも向けたカリキュラムと教材の充実が着々と行われており、期待している。図書についてはメディアセンターの設置とともに蔵書の大幅な増加計画等が素晴らしい。しかしながら図書館司書の配置が不十分と感じる。

II. 各評価項目について

評価項目	評価
I 教育理念	愛、感性、社会人基礎力、主体性、自律を育成する目標を学年別で段階的に掲げ、高い評価を得ている。4つの観点を意識して定期的な見直しも行われている。
II 学校運営	次年度の学校新築・移転に向けた事業計画・運営方針の策定は高く評価できる。今後、新しく看護大学校への移行に向けて、更なる準備を行うこと、より質の高い教育の充実、HPによる教育活動の情報公開への取り組みが必要である。
III 教育活動	新カリキュラムのさらなる充実が図られ、特に学生の主体性と自律性を育てるために、プロジェクト学習・ポートフォリオ学習が取り入れられている。教育活動の評価は領域毎に目標別の成績と学生からの評価を明確にし、卒業生に対しては卒業時の看護実践力到達度自己評価、技術の到達度評価を実施し、改善点を見出している。こうした教育活動の実践をより学校の特色として情報公開することが学校の評価にもつながると考える。 教員の授業力を高めるための研修も実施されているが、授業研究は実施されていないので今後の課題である。
IV 学修成果	看護学科では平成26年度の国家試験合格率は全国平均よりはるかに高いが100%に至っていない。助産学科では3年連続100%と成果をあげている。就職率は100%、助産師学校への進学は、受験6名で合格率100%だった。次年度は国家試験全員合格を目指し取り組むとよい。 学生の退学率については、看護学科では年々減少し、全国平均より低く教員の努力が伺える。その結果、入学した学生は看護師・助産師として社会への貢献を果たしている。今後も学生が退学しないように学習継続への支援を粘り強く行ってほしい。
V 学生支援	クラス担任と副担任が学生の学習支援を行っている。スクールカウンセリングや定期的な面談も実施し、学生生活を側面的に支援している。修学金や特別修学金制度があり、設置母体法人の医療費助成など経済的支援も充実している。今後は、保護者や卒業生との連携をより強化していく必要があると考える。
VI 教育環境	生長会を母体とし、急性期医療や地域連携、他の職種との協働などを学習する環境に恵まれている。特に外部講師には医師、専門認定看護師、他の医療介護福祉関係者等の優秀な人材を得ている。評価点が低いのは、校舎が築34年と古く、学生のアメニティーや実習室等の充実が課題であるからであろう。このような中でも、フィジカルアセスメント教育モデル人形フィジコを

	<p>4体購入し活用を図っている。平成28年の夏、校舎は新築され、従来の約2倍のスペースで学生のアメニティーや自己学習の場の設置、メディアセンターの創設、看護実践能力の向上に向けた実習や教材等学習環境の整備等が図られる。その活用が期待される。</p>
<p>VII 学生の募集と受け入れ</p>	<p>看護学科において学生の確保は順調である。指定校推薦入試での入学生のレベルも上がってきている。高校新卒者が多数であるが、社会人入学者の定着も図られており、大学や短期大学で修得した単位は例年10人前後が認定を受けている。</p> <p>助産学科の入学倍率は全国平均より高い。また、全国各地から優秀な受験生が集まっている。助産学科は平成26年に実践教育訓練給付金制度の対象に認定され、社会人の学習支援に繋がっている。</p>
<p>VIII 財務</p>	<p>学校単体では赤字だが、大阪府の運営補助金を利用し、差額は設置者繰入金にて損益を維持していることから安定していると推測する。予算管理、収支計画も法人本部にて全体管理されている。決算は生長会として一括して監査も法人会計で行われているので学校会計のみでは未実施である。財務公表も学校単独では実施しておらず、本部において社会医療法人として必要な範囲で実施され、公開されている状態ではない。今後、教育においても経営の視点は重要であり、教職員へも含めた情報提供が課題であると考ええる。</p>
<p>IX 法令等の遵守</p>	<p>看護師等養成所の運営に関する指導要領等の関係法令に基づく学則を遵守して適正な運営が行われている。個人情報の保護については生長会の「個人情報保護に関する基本方針」に則り、学生便覧の「個人情報の取り扱いについて」において学生に関する情報の管理の具体的方法を提示し、説明されている。また、学生の写真の取り扱いは、学生本人から同意を得ており、教員自身のセキュリティーや情報保護意識は高い。今後はUSBの管理、成績管理等において一層セキュリティー向上のために事務部門と連携した取り組みが重要であると考ええる。</p> <p>また、学生は、個人情報を取り扱う立場となるので、入学時から情報管理について学んでいる。さらに、実習前には、実習記録を含めた患者の情報管理について注意喚起だけでなく種々の対応について指導が行われている。</p>
<p>X 社会貢献・地域貢献</p>	<p>この項目の評価は低く、特に社会貢献等の活動は低い。現在は関連施設での夏祭りなどボランティア活動の情報を随時提供されている。看護・助産教育のカリキュラムの余裕のなさが一要因ではあると考ええるが、今後学生が地域貢献に一層取り組める体制を構築する必要があると考ええる。</p>

Ⅲ. 総評

全体として、学校として取り組むべきことは行われている。授業評価も実施されており分析もされている。設置母体法人の規模も大きく実習もグループ内施設で質の高いものが提供されており素晴らしい環境である。実際に行われている教育活動の内容や大学校への移行についてももっと広報しアピールしたほうが良いと考える。そのことが、学生や教員募集につながるのではないかと考える。

課題としては、授業評価について外部講師へどのようにフィードバックし改善へ繋げるか、また、教員募集に関係することでもあるが、教員の有給取得率向上と時間外勤務の減少があげられるのではないかと考える。教員に時間的ゆとりがないと研究などに充てる時間が確保できず、スキルアップにもつながりにくい。事務的支援も視野に入れWLBに配慮した環境づくりが必要であると考えます。

以上